在日外国人留学生の適応に関する研究(3)
ー新渡日留学生の半年間における ソーシャル・ネットワーク形成と適応ー

広島大学留学生センター　田中共子
広島大学大学教育研究センター　高井次郎
広島大学教育学部　南博文
広島大学総合科学部　藤原武弘

要　約

本研究では、異文化間交流仮説に基づき、異文化適応とソーシャル・ネットワークの関連について18人の在日外国人留学生を対象に調べた。今回は、新渡日後半年間に渡る3回シリーズの縦断的調査の最終回にあたる質問紙調査の結果をまとめている。個人の適応評価や志向性、ネットワーク形成とその構成メンバーとの関係についての評価をたずねた質問項目をクラスター分析した結果、ネットワーク、積極性、適応の3つのクラスターが認められ、これは留学生活の課題または評価の3つの様相と思われる。対人的ストレスや体の不調と、ソーシャル・スキルとの間などに相関が認められ、ネットワーク形成や積極的態度の、適応に対する関係が示された。個人をクラスター分析した結果、ネットワークの発達と孤独感において差を示す2つのクラスターに分かれた。ネットワークの構造、適応・不適応症状と関連を持つ要因、および今回の結果から得られる適応指導への示唆について検討する。

【序論】

異文化適応に関する研究方法をめぐっては、様々な論争が行なわれてきた。例えば、Church(1982)はこの領域の研究の総括のなかで、大部分のものが社会学的なアプローチをとっていると指摘し、それに代わって感情、自尊心や不安等を取り入れる心理学的な観点からの研究が望ましいとしている。また、Furnham と Bochner (1986) は、大半の研究が適応過程を横断的な手法でとらえようとしていることを問題とし、長期に渡る縦断研究が必要であることを強調している。横断調査に対する縦断的な手法のメリットは、特定の個人をある期間追跡しながらモニターすることにあるが、これによって的確な方法で適応の進行が明らかにされる。逆に、横断研究の最も大きな欠点は、異文化への滞在期間の長い者がいかにも適応しているように見えることであるが、実際には当該国を好む者が長期滞在し、そうでない者はおそらく短期で既に帰国したとも考えられる。よって、必ずしも滞在期間が進むにつれて異文化適応が達成されるとは結論できない。

日本における異文化適応の研究の多くは留学生に関するものである。高井(1989)はこの類の研

究を12篇紹介しているが、これらを以上の２つの問題点をもとに分類すれば以下のようにまとめられる。まず、社会学的アプローチと心理学的アプローチで区別するなら、数の上ではおそらく半々であろう。岩男と萩原の一連の研究(1977a、1977b、1978a、1978b、1979、1987、1988a、1988b)は前者であり、その他山本ら(1986)、モイヤー(1987)、ヒックス(1988)、上原(1988)、高井(1988)は後者にあてはまる。さらに、最近行われた研究に注目すれば、佐野(1990)の留学生の社会的困難度の研究は前者に、姚と松原(1989)の留学生のストレスの研究は後者に属するであろう。このように、異文化適応を測定する仕方は一様でなく、そのため測定されたものが必ずしも同じ意味での適応過程をあらわしているとはいえない。

横断、縦断研究という観点から区別した場合には、圧倒的に前者が後者を上回る。その中で岩男と萩原（1978、1979)、山本ら（1986)、ヒックス（1988）と高井（1988）は縦断的な研究を行っているが、いずれも試行と試行の間の期間が比較的あいており（１年の間に２－３回)、決して精密な追跡調査とはいえない。

以上、日本の留学生の異文化適応研究は多くの問題点を残している。これらを踏まえて、今回の試みは新たな心理学的アプローチを用いて、留学生の異文化適応過程をきめ細かく、縦断的に調査するものである。適応の測定方法として、田中、高井、神山、村中と藤原(1990)で試みられた心理的適応の質問項目をもとに、本研究はさらに留学生の社会的ネットワークとその機能を検討するための項目を加えた。社会的ネットワークは変化しつつあるダイナミックな要因であるとみられ、縦断的に適応をみて、その過程を説明するにはこのような変数が必要であることはBochner、McLeodとLin(1977)によって指摘されている。社会的ネットワークの構成および機能が、いかに在日留学生の滞在初期において適応に影響するかを検討することが、本研究の狙いである。

本研究シリーズは３部に分けて構成されている。留学生の来日直後、第３カ月目と第６カ月目の３回にわたる調査を、前期と後期の二期行ない、最初の報告(田中、高井、南と藤原、1990)は前期１回目の結果について、本報告は２回目の結果について、部分的に報告している。さらに半年間を通じての差異と変化については、今後報告する予定である。

今回は約６カ月間の日本での滞在を終える時期に、どの程度社会的ネットワークが確立され、それはどのような構成をとっており、どのような機能を果たしているかを調べ、それが心理的適応とどのような関わりをもつのかを検討することが目的である。

【方法】

１、調査対象者

平成二年度四月に新渡日して広島大学に来学し、来日後約半年が経過している留学生18名(男性13名、女性５名、平均年齢28.4才、SD＝3.17)。留学生専用宿舎に居住しており、専攻は日本語研

修コース13名、教育学部研究生４名、工学部研究生１名。国籍は、インドネシア５名、台湾４名、マレーシア・フィリピン・ベトナム・パキスタン・トルコ・メキシコ・ペルー・ブラジル・スペイン各１名であった。

２、調査内容

(1) ＡＤＱ II (Adaptation Questionnaire II)

日本での留学生活の適応状態と、関連する要因についての質問紙。先に実施した、同一調査対象者に対する来日3カ月時点の調査で用いたＡＤＱ (Adaptaion Questionnaire) (田中、高井、神山、村中、藤原、1990)を一部改訂した。ＡＤＱに含まれる留学生活の評価や心理的反応に関する項目(健康状態、日本語力、ソーシャル・スキル、対人志向性、海外との連絡回数、留学生活の満足感、不適応症状、来日後の健康状態の変化、適応状態の評価、ストレス、ストレスへの対処)に、留学目的とその達成度、およびカルチャーショックや留学生活の感想についての自由記述をつけ加えた。留学目的については、留学の目的を合計100％としたとき、勉強、日本語、異文化体験はそれぞれその何％を占めるか、また目的の達成度についてはそれぞれ当初の予定の何％が達成されたところかをたずねた。なお、性別、年齢などのデモグラフィック・データは、先の調査ですでに把握されている。

(2) ＳＮＱ (Social Network Questionnaire)

前回の調査と同じものを用いた。日本で大切な関わりのある人を5-10人あげて、性別、年齢、国籍、期待できる援助、関係の満足度、依存度合い、接触頻度、話題、知った時期、居住地についてたずねたもの。

３、手続き

来日後約半年目にあたる1990年９月中旬から下旬にかけて、調査対象者に調査用紙とお礼の小さな文房具を渡して記入を依頼し、数日後に回収した。使用言語は日本語及び英語であった。なお回収率は100％であった。

４、分析方法

まず適応状態や留学の評価、ネットワークの構造と評価について集計を行った。次にネットワークと適応に関する項目についてクラスター分析を行い、また項目間の相関を求めた。得点の換算方法については、先の調査に習った。留学目的およびその達成度に関しては、記入された数字を用いた。回答した個人についてもクラスター分析を行い、そしてクラスター間の違いがどの項目でみられるかを調べた。

【結果】

1、調査対象者の適応状態及びネットワークの構造

(1) 調査対象者の自己評価

調査対象者の8割が、少なくとも日常会話ができる日本語力があると考え(図1-a)、3割は日本人と同じように行動できると答えている(図1-b)。友人は多い方だったと答えたものが72.2%(図1-c)、外向・内向の志向性はほぼ半数ずつである(図1-d)。

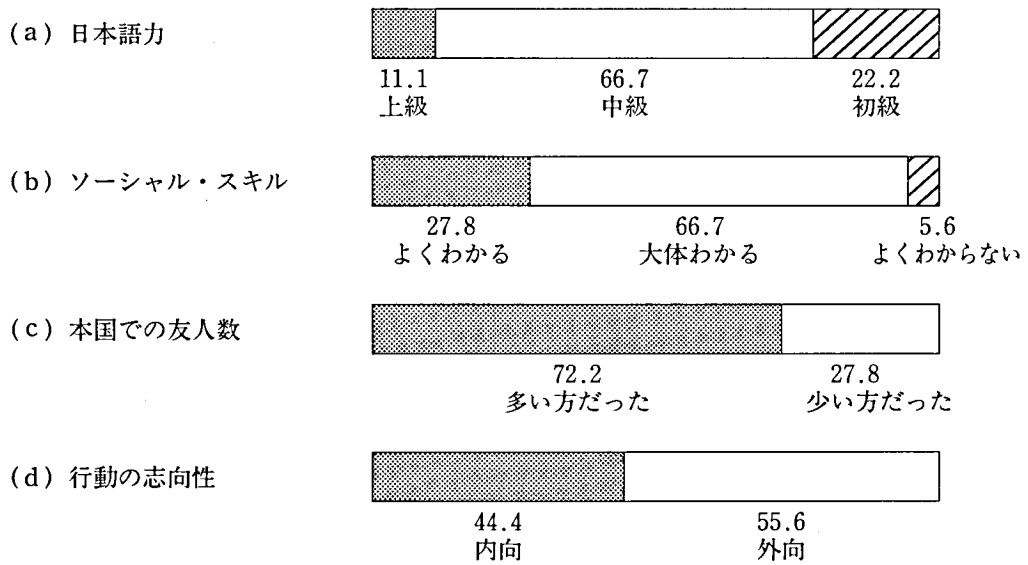


図1　調査対象者による自己評価
数字は%を示す。

(2) 調査対象者の適応評価

一割は留学生活に不満足感を持つが(図2-a)、94.4%が孤独感をほとんど感じていない(図2-b)。1割は来日以降健康が悪化している(図2-c)。不適応症状では体調不良より不安やホームシックなどの精神面がより認識される(図2-d)。学習面の適応は22.2%がよくないと答えている(図2-e)。半数が人間関係のストレスを持ち(図2-f)、ストレスの対処法としては気晴らしをすることが最も多い(図2-g)。

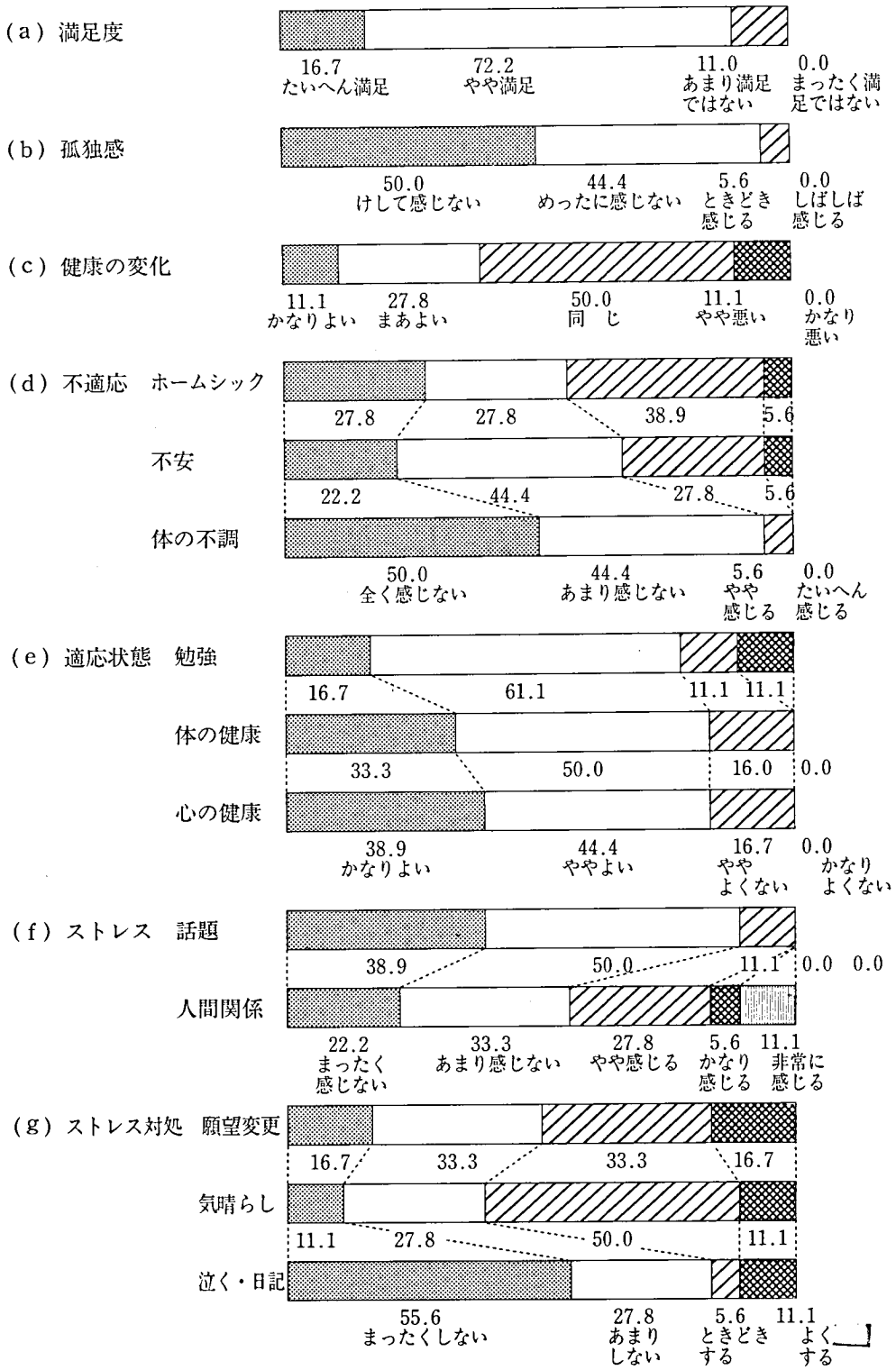


図2　調査対象者による適応評価
数字は%を示す。

(3) ネットワーク構成員のデモグラフィック・データ

ネットワーク構成員は144人（一人あたり平均8.0人）で、その6割は男性だが（図3-a）、女性の被調査者のあげる相手の性比は男女半々に近い（図3-b）。全体では20代が半数を占めるが（図3-c）、本人の年齢が20代より30代のほうが相手の年齢幅が広い（図3-d）。半数が日本人である（図3-e）。本人との関係は、学内の学生（52人、36.1%）、学外の友人知人（47人、32.6%）が多く、次いで指導教官14人、研究室の学生10人、ホストファミリー9人、他の大学スタッフ8人があげられたが、チューターの学生はわずか2人、親戚・家族は同じく2人であった（図3-f）。

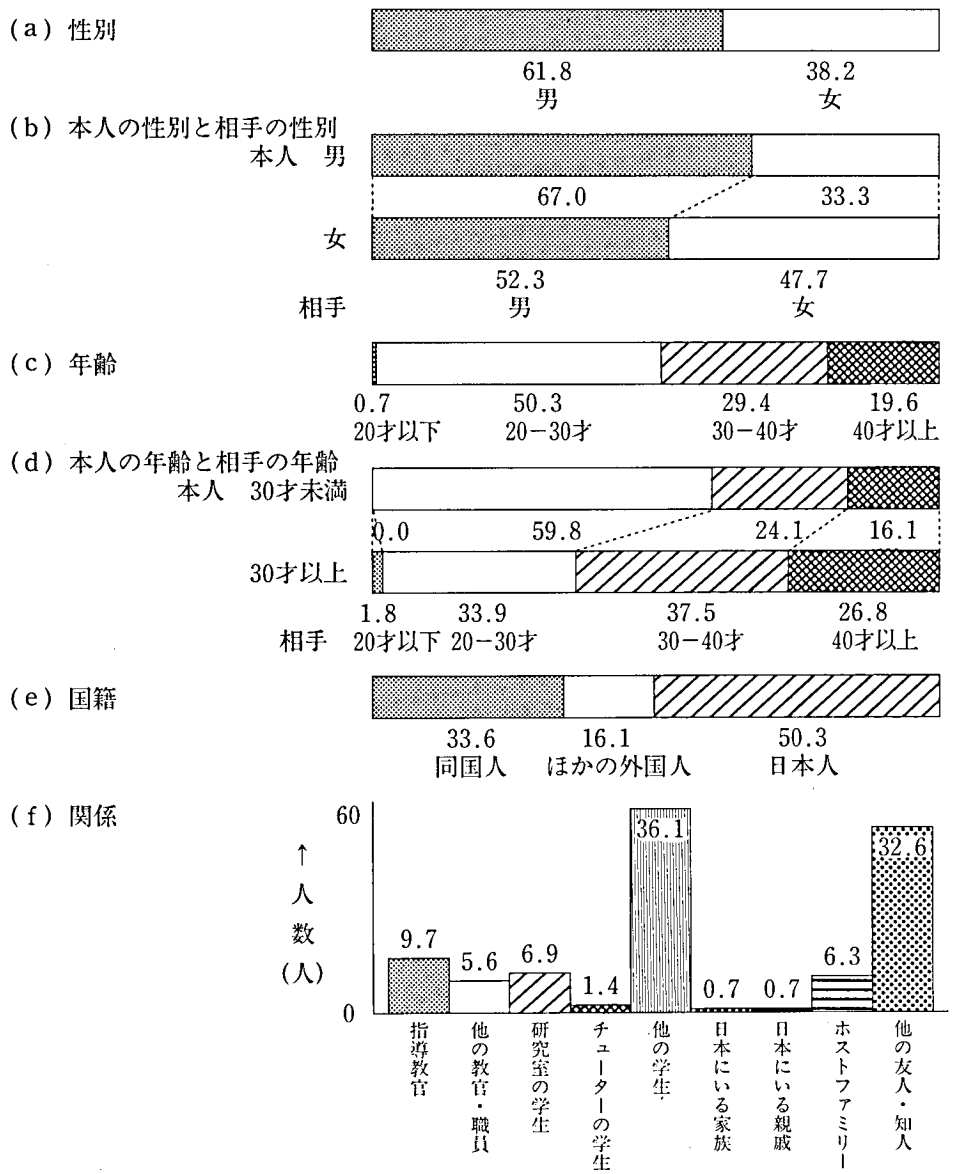


図3 ネットワーク構成員に関するデモグラフィック・データ
数字は%を示す。

(4) ネットワーク構成員との関係

74.2%の相手とは週一回以上会う(図4-a)。来日前に知った人が21.5%(図4-b)、広島以外に住む人が20.1%である(図4-c)。

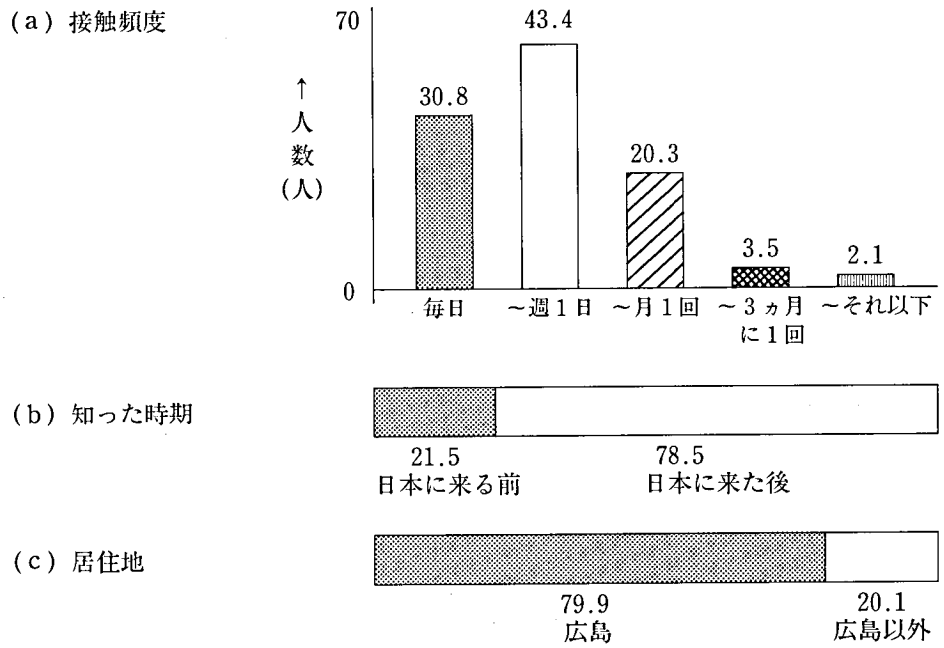


図4　調査対象者とネットワーク構成員との関係の持ち方
数字は%を示す。

(5) ネットワーク構成員との関係の評価

依存関係では、より頼る33.3%、より頼られる4.9%、同じ61.8%(図5-a)。一般的話題は97.9%の人と話すが、個人的話題を話すのは54.5%の人とのみ(図5-b)。6割の関係にはたいへん満足している(図5-c)。国籍別にみると、他の外国人とは依存度合いが等しい関係を築き(図5-d)、かつ満足度が高い(図5-e)。日本人にはより頼っているが(図5-d)、満足度は比較的低い(図5-e)。本人との関係別の評価を次に示すが、家族・親戚およびチューターの学生は少数のため解析からはずした。指導教官への満足感はやや低い(図5-f)。大学スタッフには頼りがちでも、ホストファミリーとは学内の学生と同程度のエクイティーがある(図5-g)。学生同士は、個人的なことを6-7割と話すなど、個人的な話をしやすい傾向にあるが、ホストファミリーと個人的な話をするのは4割以下である(図5-h)。14.3%の指導教官とは一般的な話もしない(図5-i)。

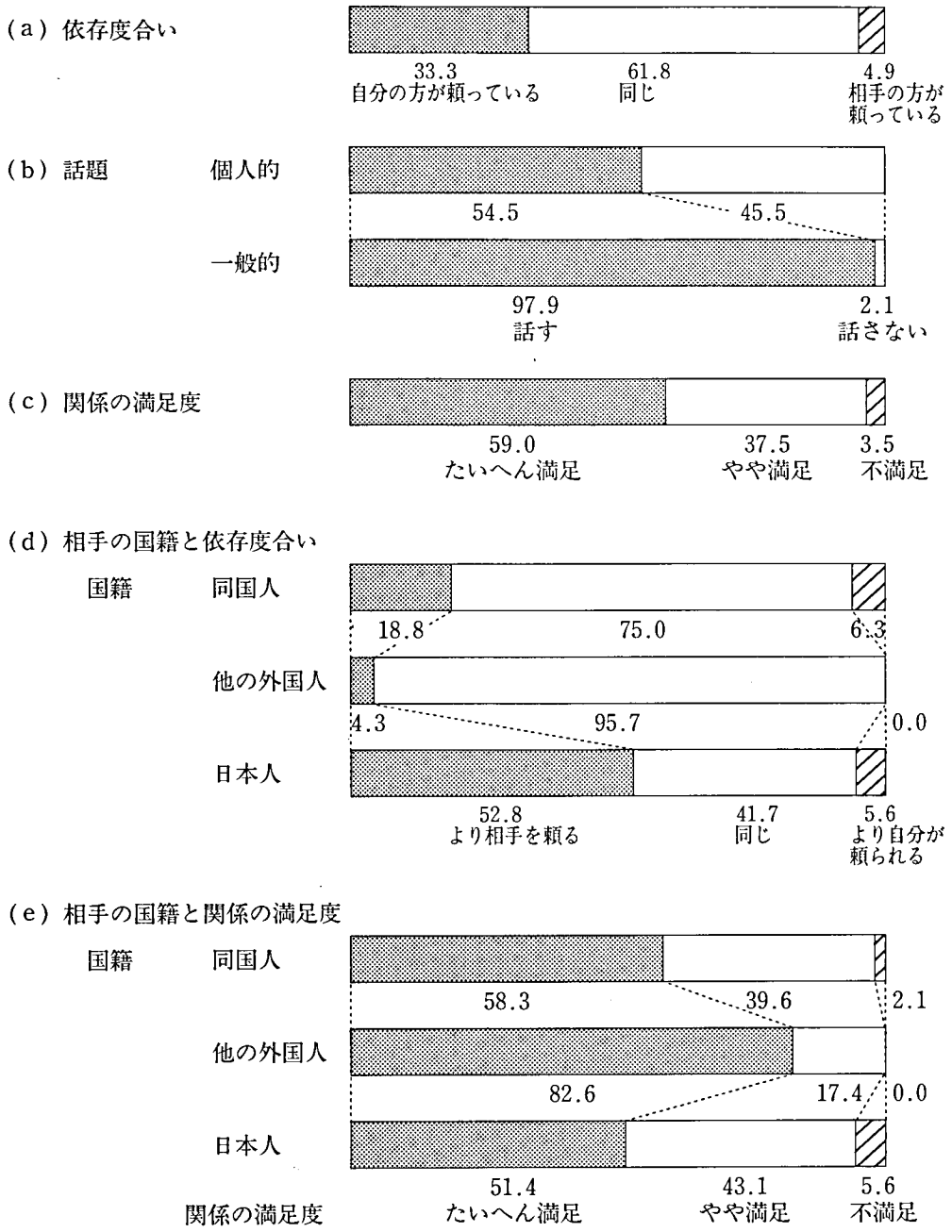
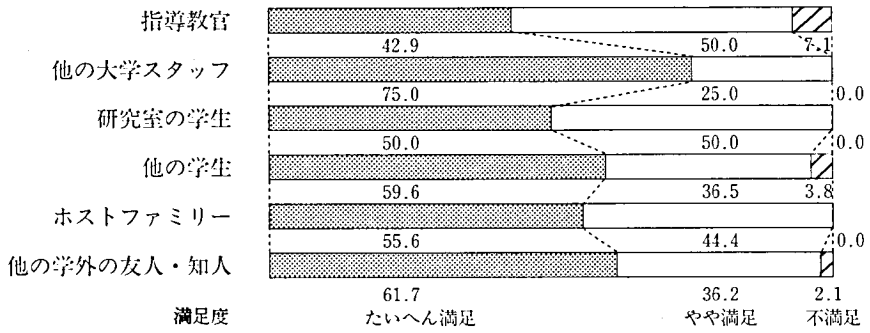
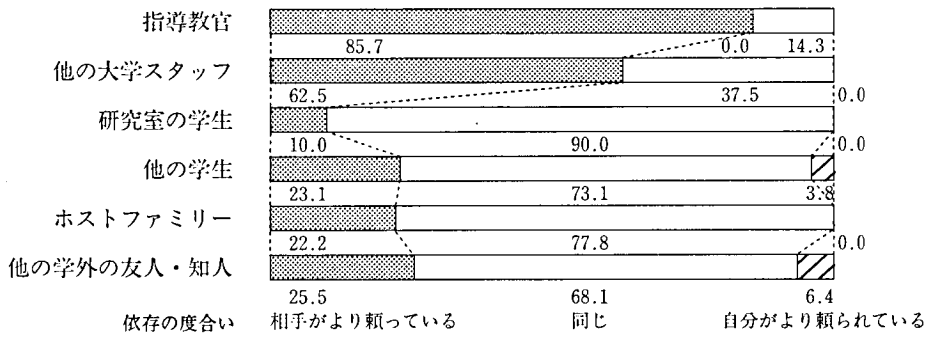


図5　ネットワーク構成員との関係に対する調査対象者の評価
数字は%を示す。

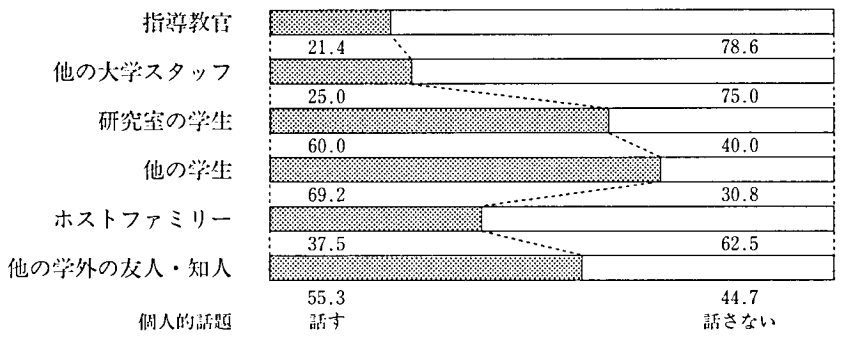
（f）本人との関係と関係の満足度



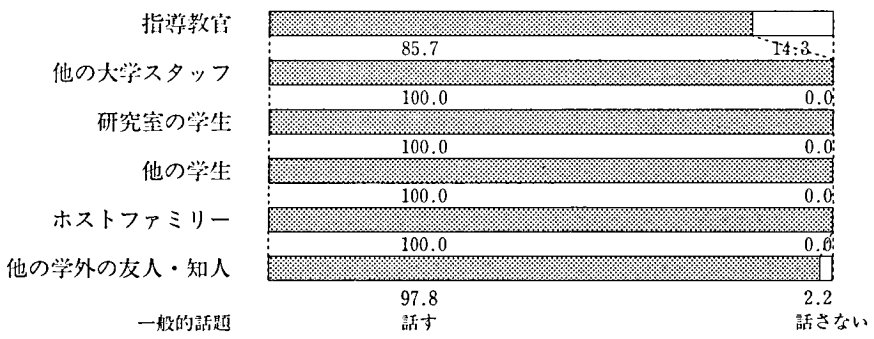
（g）本人との関係と依存の度合い



（h）本人との関係と個人的話題の有無



（i）本人との関係と一般的話題の有無

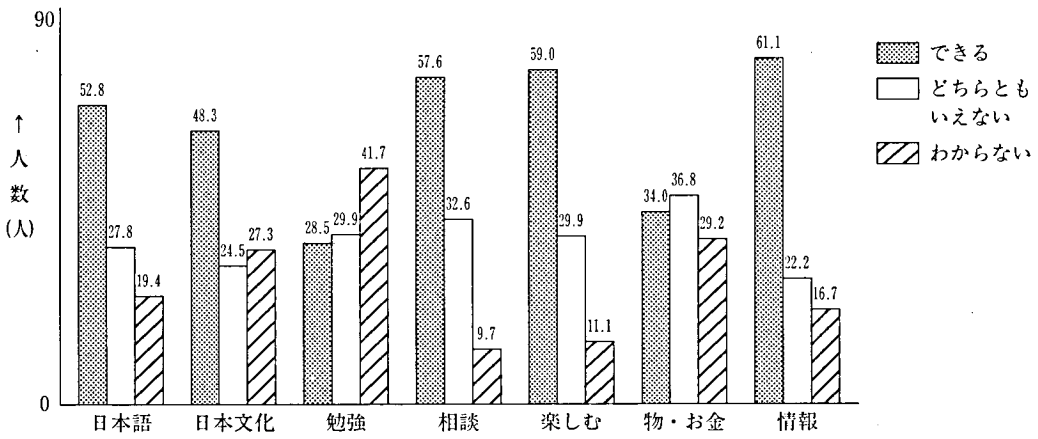


（図5　ネットワーク構成員との関係に対する調査対象者の評価　つづき）

(6) ネットワーク構成員から期待できる援助

勉強、物・お金の援助は比較的得られにくい(図6-a)。国籍別でみると、日本語、日本文化、情報、勉強では日本人の援助が、楽しみ、物・お金では同国人の、相談では同国人と日本人の援助が多い傾向がある(図6-b)。外国人からの援助はそれらと比べ多くはないが、援助間で比較すれば楽しみや物・お金の援助がやや多い(図6-b)。

(a) 援助を期待できる度合い



(b) 相手の国籍と期待できる援助

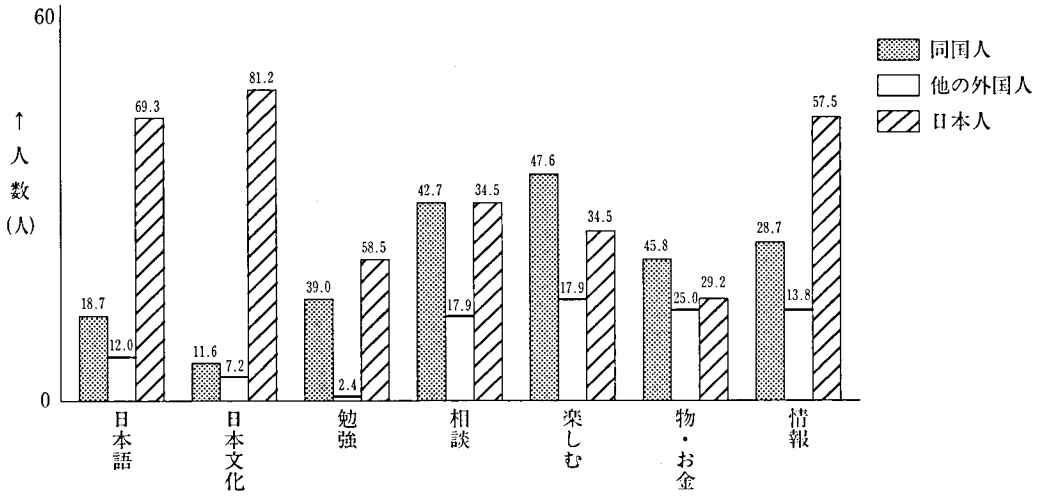


図6 期待できる援助
数字は%を示す。

(7) 海外との連絡回数

家族とは10回以上(44.4%)、友人とは2-4回 (38.9%) の連絡が最も多い (図7)。

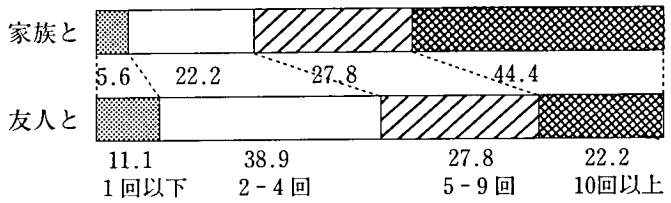


図7　海外の人との半年間の連絡回数
数字は%を示す。

(8) 留学の目的とその達成度

目的の比重は、勉強、日本語、異文化体験の順だが(図8-a)、達成度はその逆になっている(図8-b)。

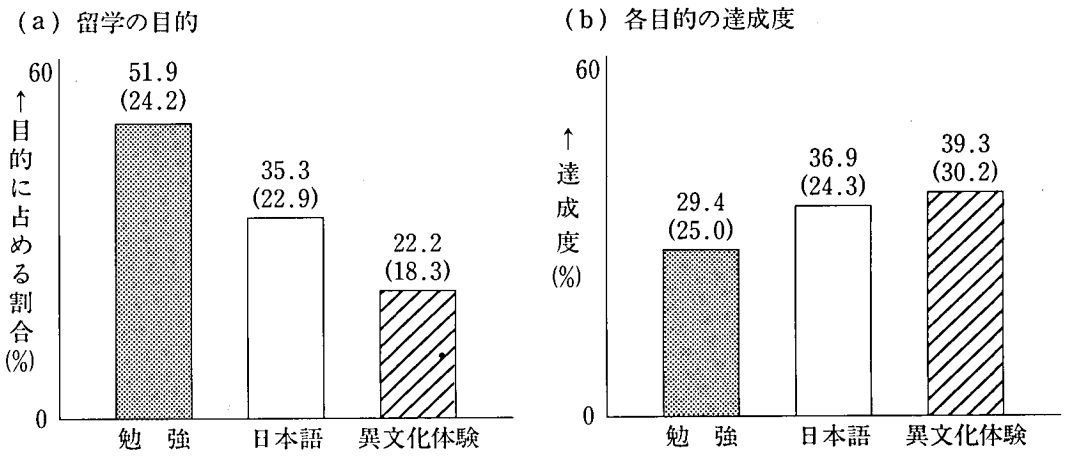


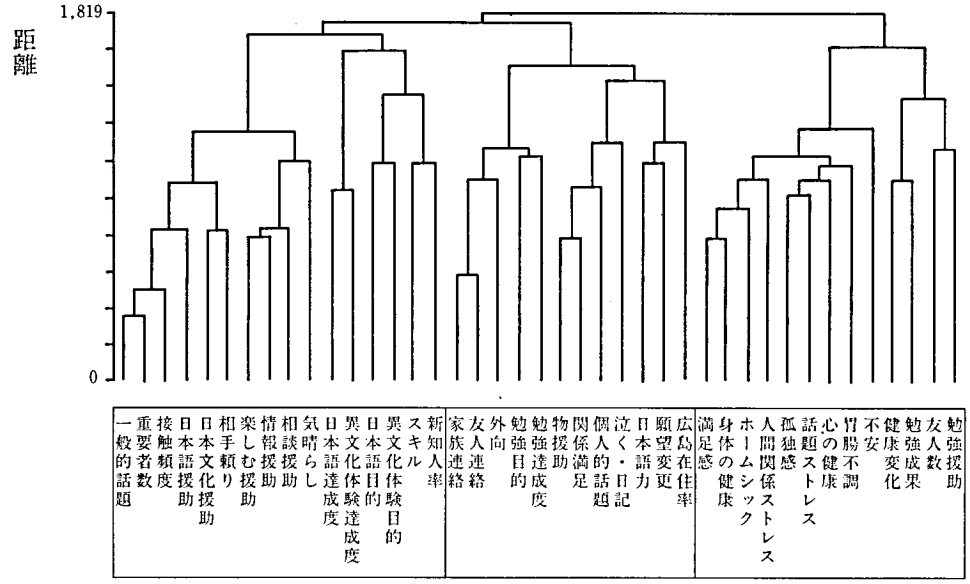
図8　留学の目的と達成度

注　目的は、全ての目的を100%としたとき、各々の目的がその中に占める割合について答えたものについて、平均値を求めた。達成度は、完全に達成できたときを100%として、調査時点での達成度を各々の目的別に答えたものについて、平均値を求めた。(　　) 内は、SD。

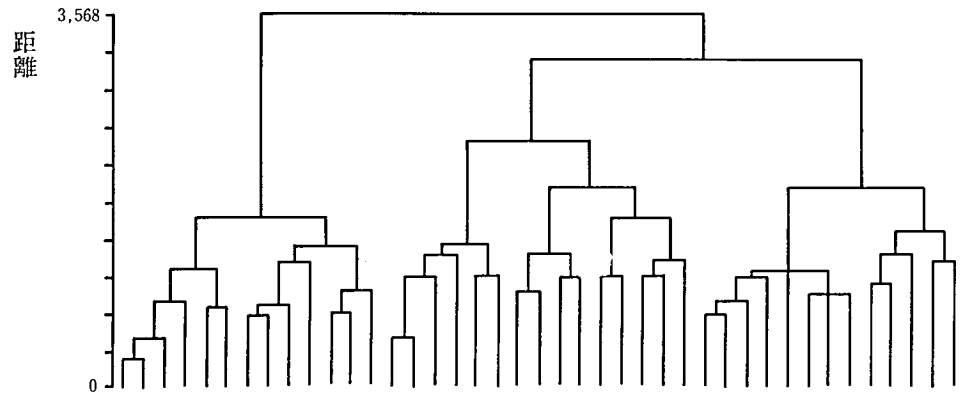
2、測定項目に関するクラスター分析

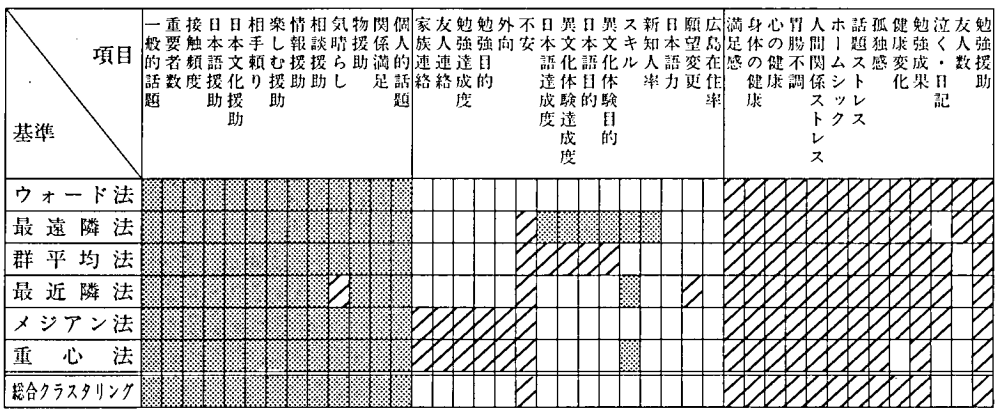
図9の上部には比較的解釈しやすい最遠隣法およびウォード法によるデンドログラムを例として示し、下部には他の基準による結果をまとめた。いずれの基準を用いた場合も3つのクラスターに分けられ、それぞれ図の左からA：ネットワークや援助に関する項目、B：日本語習得や異文化体験、外向性などの積極性に関する項目、C：適応、不適応に関する項目を含んでいた。各々の項目が所属するクラスターに比較的安定性があるため、全ての基準の結果を総合的に判断して3分類とし、図9の最下行に示した。

デンドログラム



クラスタリング





ネットワーク関連　積極性関連　適応関連

図9　質問項目のクラスター分析によるデンドログラムの例と6つの基準によるクラスタリング

デンドログラム下の項目はクラスターごとに囲んだ。各項目が基準を変えた場合に、3つのうち、どのクラスターに属したかを下部にまとめた。その結果をもとに、総合クラスタリングを行い、最下行に示した。同じ模様は、同じクラスターであることを示す。

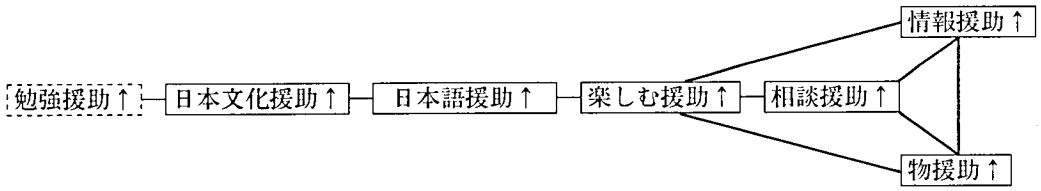
3、項目間の相関

項目間の相関を図11ａ，ｂ，ｃに示した。各項目には、所属するクラスターについての情報をつけた。図11-ａには援助項目間の相関のみをとりだした。図の左方には勉強や言語援助、右方には情緒的あるいは道具的な援助と分かれる。相談の援助を受けていることが、他の情緒的・道具的援助を受けていることとつながっている。

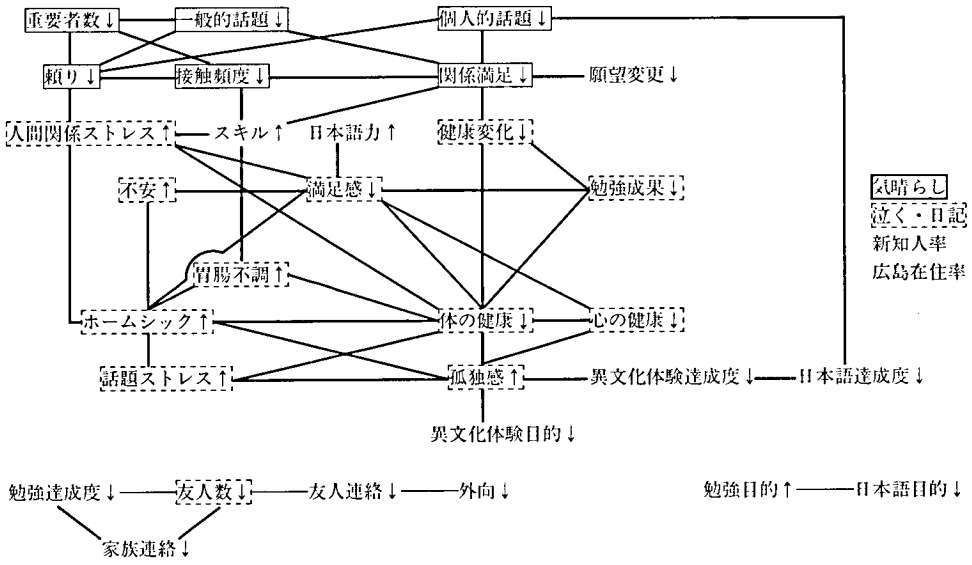
図11-ｂには、ネットワークと適応項目についての相関を示した。身体の健康とつながりをもつものは、孤独感、人間関係や話題のストレス、ホームシック、満足感、そして心の健康である。なお満足感の低下は、勉強成果がおもわしくないこととも、不適応症状の出現とも関係している。異文化体験を目的にするほど孤独感が少ないが、日本人の話がわからなかったり、ホームシックだったりする場合、より孤独である。勉強が目的であるほど、日本語を目的としない傾向がある。勉強がうまくいっている方が家族とよく連絡する傾向にあるが、友人とは元来の友人数や外向性に応じて連絡している。日本語力やソーシャル・スキルが低いうちの方が、人間関係上のストレスが少なく、体調の不調も少ない。そしてその場合、より頻繁に会う、満足度の高い関係を伴っている。個人的話題を話すかどうかは、日本語力ではなく日本語目的の達成度と関連しており、個人的な話をすることは、関係の満足度や相手を頼る度合いが高いことと関連している。なお、知った時期や居住地が特に関連をもつ項目はみいだされなかった。図11－ｂの左上には援助やネットワークに関する項目が位置し、これらと結びつく適応・不適応関連項目は、対人的ストレスと健康変化である。またネットワークに対し、積極性関連項目の中からは、スキルと願望の変更、日本語達成度が結びついている。適応・不適応と結びつく積極性の項目は、異文化体験目的とその達成度、日本語力、ソーシャル・スキルであり、友人や家族との連絡、勉強目的の達成度も結びつく。

ネットワークと適応に関する項目間での相関は、図11-ｃに示した。勉強の援助は、他の援助と離れてただ一つ、ネットワーク関連でなく適応関連のクラスターに入っており、ネットワークに関する項目とは結びつかない。勉強の援助の増加は、同じ適応関係のクラスターに属する学習の不成功や孤独感の増加と関連している。他の援助の増加はネットワークの発展と結びついている。

(a) 援助項目間の相関



(b) ネットワークと適応に関する項目間の相関



(c) 援助とネットワーク、適応に関する項目との相関

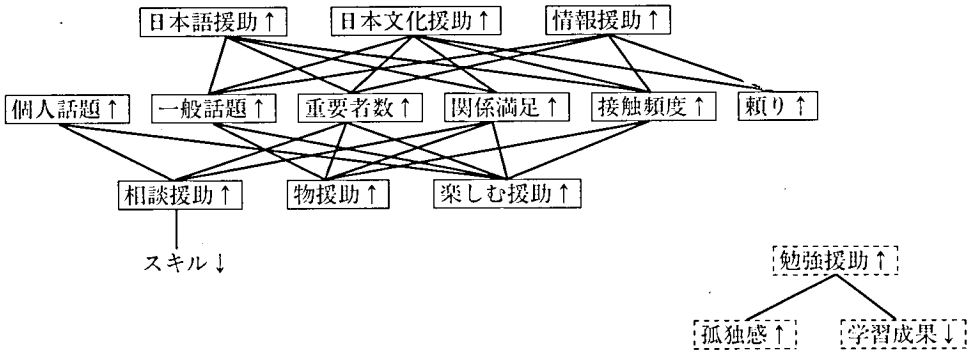


図11 項 目 間 の 相 関

———は有意の相関関係（P＜0.05）があることを示し、↑↓は変化の方向を示す。
▭はネットワーク関連、⬚は適応関連、かこみのないものは積極性関連のクラスターに属する項目であることを示す。

4、調査対象者のクラスター分析

今回の調査対象者は2つのクラスターに分かれると考えられる。最遠隣法とウォード法のデンドログラムの例と、6つの基準によるクラスタリングの結果を図12に示す。総合的に判断してA、Bの2つのクラスターに分けた結果を、最下行に示す。

比較的左に位置するA群（7人）、右に位置するB群（11人）の2つのクラスターの特性の差を、測定項目ごとにt検定を行って検討した。その結果、Aの方がより楽しみや情報の援助が多く、異文化体験をよく達成しており、気晴らしをし、孤独感が低く、元来友人数が多い（$p < 0.05$）。すなわち、サポート・ネットワークの発達と孤独感の高低において違いがみられた。

なお、ウォード法のデンドログラムでそれぞれ最も左（例1）と最も右（例2）に位置した学生の場合、留学生活の感想および新入居者へのアドバイスを自由記述したなかで、次のように述べている。例1「学校の勉強以外にできるだけたくさんの活動にも積極的に参加したほうがいい。異文化の体験もでき、学校で勉強できないものごと、言葉使いなども勉強できると思う」。例2「日本人はまともにつきあってくれない。一生懸命友達を作ろうと努力してきたが、ほとんどだめだったので、もうあきらめた。今は何でも同国人としている」。それぞれの異文化体験やネットワーク構築に関する取り組み方の違いが表現されている。

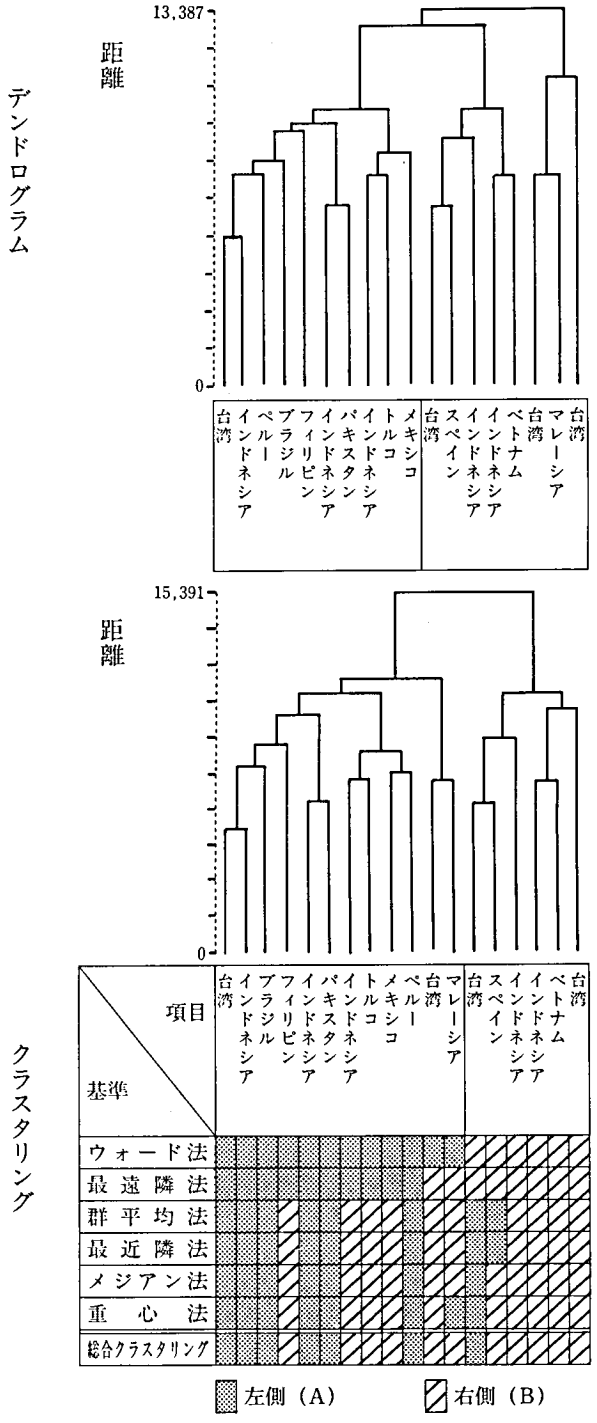


図12　調査対象者のクラスター分析によるデンドログラムの例と6つの基準によるクラスタリング

注 項目はクラスターごとに囲んだ。基準をかえた場合に属するクラスターの違いを下部にまとめ、総合的に判断したクラスタリング結果を最下行に示した。

【考察】

今回の結果は、渡日後半年たった時点における留学生の適応とサポート・ネットワークの発達についていくつかの点を示唆している。

まず、ネットワーク、積極性、適応に関する3つのクラスターが存在することは、この時期の留学生活に3つの様相があることを示している。これらを各々留学生活の課題、あるいは留学生活の質を規定する各次元として考えるとよいのかもしれない。クラスター間では、部分的に項目間の有意な相関が存在する。この部分は、適応に対する援助の効果や積極的態度の影響を示唆している。すなわち、適応に資するものとして、満足でき、頼れる、個人的な話のできる人間関係があることがあげられる。そして異文化に関心を持ち積極的に入り込み、スキルと日本語力があることが適応に大切な役割を果たす。勉強の援助は、学習を成功に導くと言うよりは、むしろ援助を必要とした不適応の証と考えられる。山本ら(1985)も、研究領域に関しては、援助が多い留学生ほど不適応であることを報告している。援助が多いほど良好な適応が果たされる、あるいは不適応が緩和されるとした仮説を考えた場合、それは援助や適応の単なる総体として確認される機能ではなく、特定の援助と適応の間に見いだされるつながりと言えよう。

回答者個人のクラスター分析では、ネットワークの持っている援助の側面の発達がクラスターをわけている。前回調査時には文化圏ごとに分かれる傾向があったわけだが、その後2～3ケ月をへた今回の時点では、個人のスタイルが分化し出現したことが確認された。古川ら(1983)によれば、大学新入学後安定したネットワークを形成するには数カ月を要したという。この間に未知の環境に対する認知が分化し、個々の要素が統合され、より構造化されたものになる過程が進行する。半年間で個人のネットワークに関する特徴が明らかになってきたことは、その個人なりに安定した関係に入ってきた可能性を示唆する。環境移行の成否に、ネットワークの再構成とサポートの充足が大きく関与していると考えるなら、これは本人の今後の異文化での適応や体験の質を予測する因子になるかもしれない。異文化適応を人との関係のとり方によって分類できるという我々の先の結果からすれば(田中、高井、神山、村中、藤原、1990)、異文化において積極的に行動半径を広げる者と、勉強課題などを中心に狭い範囲にこもる学生がいることを予測することも可能である。今回、質問紙調査によってネットワーク形成の不十分な集団が識別されたことは、学生の教育または臨床的な適応指導への示唆に富んだ結果といえる。すなわち、ネットワーク形成の未発達や異国における孤独感に陥りやすい場合には、ネットワークの形成を促進するような機会を与えられたり、あるいは充実した対人関係の形成に資するような技能を習得させる指導が可能であることが望ましい。また、彼らの適応パタンを尊重しながらも予備的にカウンセリングを行い、今後の留学生活に適切な広がりをもたらすような方向性を与えられれば効果的であろう。

日本人とのネットワーク形成は、エクイティが乏しく満足感が低く、日本に関する知識や情報と

いった日本に関する現実的な援助に比重が高い。同国あるいは外国人の友人と比べて、個人的、情緒的なつながりが形成されにくい。対等の関係の方が満足度が高いという知見は、kelly (1979) によっても示唆されている。Furnham と Bochner(1982)は、ネットワークの機能を出身地によって3種類に分けて述べている。自文化を表出し許容しあう同国人、レクリエーションあるいは課題性や文化的背景のない活動を中心にした外国人、および勉強や専門上の抱負を道具的に促進するつながりを中心にした受け入れ国側の人とのそれぞれのつながりが区別される。これを期待できる援助は何であるかという視点でみてみれば、同国は相談の、外国は楽しみの、日本は勉強と日本語の援助が多いことになろう。今回の調査結果では、同国人や日本人の援助が量的に目立ち、これら期待される項目がそれぞれにおいて含まれている。外国人については、そもそもネットワーク内であげられた数が少いため、外国人の援助が目立つ援助項目は特にない。楽しみに関しても、実際には日本人と特に同国人がその援助を担っている。しかしながら援助項目間の比較をすれば、外国人は楽しむ援助が期待されやすいとはいえる。また、日本ではアメリカと比較した場合に、目上の人からの援助を受け易く、自分の方が頼っているという関係が多い(Minami, H. and Yamaguchi, S., 1989)。これはヨコ社会に比較したタテ社会の特徴とも考えられる。留学生は、日本人との関係においては援助を受けるほうにまわりがちであることは、外国人が新しく未知の環境に住むからということだけでなく、こうした影響もあるかもしれない。日本における留学生は、日本のネットワーク構造の特質と無縁ではいられないであろう。

なお、チューターの日本人学生は二人しかあげられておらず、さほど注目されない。この点は、Hicks (1988) が、チューターにはたいした期待も貢献もないとした知見と矛盾しない。

大学新入生の適応とサポートについて、Hays と Oxlay (1986) は、大学入学後4、8、12週間後の調査を行った。4週間後には新しい知人の割合、自分との類似性、メンバーとのキャンパスでの相互作用が、12週間後ではネットワークサイズがそれぞれ適応と有意に関連していることが見いだされた。このことは、ネットワークの構造的特徴が大学生活の適応と関係し、適応と結びつくその特徴が時期とともに変化していくことを示している。なお今回、重要者数に適応との関連は見いだされていないが、勉強以外の援助量とは結びつきがあった。

項目や個人のクラスター分析に、用いた基準によらず安定性が見いだされたことは、因子分析の適用に無理のある少数例に対し、その分類の見当をつけるにあたって、有用な手法であることを示唆している。異質性の高い例については、特にこの方法を試みる価値があろう。

この研究では、新渡日留学生のネットワークの発達と適応の変化を調べている。日本の大学に始めて来学する場合の学籍は、日本語研修あるいは研究生の場合がほとんどである。研修コースでは外国人のみでクラスを形成して語学学習に専念し、研究生は学習カリキュラムの拘束がなく、まだ学位を目的とした学習をしていない状態にある。留学生専用宿舎に新渡日学生を優先して入居させるのは日本の施策となっているが、今回は全員その宿舎に居住している。そこは日本人とのつなが

りや活動が著しく制限される隔離環境下である。いわば、最初の半年でこのような結果になるような形態を、施策的に進めているのである。留学生の調査においては、バックグラウンドが雑多であることが調査の大きな障害として認知されているため、できるだけ均質な調査対象者を選定し、測定の意味を明確にするよう配慮しなければならない。今回の均質性はその意味で重要であるが、反面この情報は全留学生を代表するものではない。来日二年目以降で学位目的の学習が本格化している学生については、援助の適応に関する作用などにまた別の知見が得られると期待される。

渡日時点からの経時的変化については、全調査データを用いた詳細な解析を別途必要としている。

本研究の一部は、1990年度第一次松下国際財団研究助成（「アジア系留学生の異文化適応促進のためのソーシャル・スキル・トレーニング」代表者・藤原武弘）の援助を得て実施された。

引用文献

Bochner,S., McLeod,B.M. and Lin,A. 1977 Cross-cultural contact and the development of an international perspective. *Journal of Social Psychology*, **107**, 29-41.

Church, A.T. 1982 Sojourner adjustment. *Psychological Bulletin*, **91**, 1982, 540-572.

古川雅文、藤原武弘、井上弥、石井眞治、福田廣　1983　環境移行にともなう対人関係の認知についての微視発生的研究　心理学研究, **53**, 330-336

Furnham,A. and Bochner,S. 1982 Social Difficulty in a foreign culture : An empirical analysis of culture schock. In S. Bochner (Ed.), *Culture in Contact*. Oxford : Pergamon Press.

Furnham,A. and Bochner,S. 1986 *Culture Shock*. London : Methuen.

Hays,R.B. and Oxley,D. 1986 Social Networks and the coping process : Creating personal communities. In B.H. Gottlieb (Ed.), *Social network and social support*. Bevery Hills : Sage Publications.

Hicks,J.E. 1988 Studies on the adjustment of foreign students in Japan : With focus on interpersonal relations. Doctoral dissertation, Faculty of Education, Hiroshima University

岩男寿美子、萩原　滋　1977(a)　在日留学生の対日イメージ(1)：第一次調査資料と若干の考察　慶応義塾大学新聞研究所年報、**8**、9-34

岩男寿美子、萩原　滋　1977(b)　在日留学生の対日イメージ(2)：ＳＤプロフィールの検討　慶応義塾大学新聞研究所年報、**9**、27-72

岩男寿美子、萩原　滋　1978(a)　在日留学生の対日イメージ(3)：滞日期間に伴う変化　慶応義塾大学新聞研究所年報、**10**、15-29

岩男寿美子、萩原　滋　1978(b)　在日留学生の対日イメージ(4)：ケース・スタディ　慶応義塾大学

新聞研究所年報、11、17-29
岩男寿美子、萩原　滋　1979　在日留学生の対日イメージ(5)：パネル・スタディ　慶応義塾大学新聞研究所年報、13、21-50
岩男寿美子、萩原　滋　1987(a)　在日留学生の対日イメージ(6)：10年後の再調査　慶応義塾大学新聞研究所年報、13、21-50
岩男寿美子、萩原　滋　1988(a)　在日留学生の対日イメージ(10)：愉快・不愉快な出来事の分析　慶応義塾大学新聞研究所年報、30、21-40
岩男寿美子、萩原　滋　1988(b)　在日留学生の対日イメージ(11)：日本人の好む外国人　慶応義塾大学新聞研究所年報、31、35-52
Kelly, H. H. 1979 *Personal Relationship : Their Structure and Processes*. Hillsdale, New Jersey : Lawrence Eelbaum Asociates（ハロルド・H・ケリー（黒川正流、藤原武弘訳）　親密な二人についての社会心理学　1989　ナカニシヤ出版）
Minami, H. and Yamaguchi, S. 1989 A cross-cultural study on social support structures of college freshmen in the U.S.A. and Japan. In Forgas, J.P. and Innes, J.M. (Eds.) *Recent Advances in Social Psychology : An Internaitonal Perspective*. North Holland : Elsevier Science Publishers B.V. 401-411
モイヤー康子　1987　心理ストレスの要因と対処の仕方：在日留学生の場合　異文化間教育　1、81-97
佐野秀樹　1990　異文化社会への適応困難度に関する研究　行動療法研究　16、37-44
高井次郎　1988　The adjustment of international students at a third-culture-like academic comyunity in Japan. 埼玉大学教養学部修士論文
高井次郎　1989　在日外国人留学生の適応研究の総括　名古屋大学教育学部紀要：教育心理学科　36、139－147
田中共子、高井次郎、神山貴弥、村中千穂、藤原武弘　1990　在日外国人留学生の適応に関する研究(1)－異文化適応尺度の因子構造の検討－　広島大学総合科学部紀要III、14
田中共子、高井次郎、南博文、藤原武弘　1990　在日外国人留学生の適応に関する研究(2)－新渡日留学生の一学期間におけるソーシャル・ネットワーク形成と適応－　広島大学総合科学部紀要III、14
上原麻子　1988　留学生の異文化適応―言語習得及び異文化適応―理論的・実践的研究　広島大学教育学部紀要
山本多喜司（代表）　1986　異文化環境への適応に関する環境心理学的研究　昭和60年度科学研究費補助金研究成果報告書
姚霞玲、松原達哉　1990　留学生のストレスに関する研究(1)　－生活ストレッサーを中心に－　学生相談研究　11、1-11